



ショートコメント

★★★★★

ドライブ・イン・マンハッタン

2023 年／アメリカ映画
配給：東京テアトル／100 分

2025（令和 7）年 2 月 23 日鑑賞

テアトル梅田

Data 2025-19

監督・脚本：クリスティ・ホール

出演：ダコタ・ジョンソン／
ショーン・ベン

みどころ

本作は、ダコタ・ジョンソン（乗客）とショーン・ベン（タクシー運転手）が共演した、タクシー内での 2 人だけの 100 分間の会話劇。もともとの企画は小さなものだったが、完成後は超メジャーに！

私はタクシー乗車時に運転手から話しかけられるのは嫌。手帳やスマホをチェックしている時は、なおさらだ。それは、ジョン・F・ケネディ国際空港でタクシーに乗った女性も同じだったはずだが、会話は意外にも……。弁護士歴 50 年を迎えた私は人物評価にそれなりの自信を持っているが、本作のタクシー運転手のそれは私以上！彼の観察眼と分析力はすごい。

そんな分析力で丸裸にされることを普通の若い女性客は嫌がるものだが、さて本作では？近々鑑賞する、瀧内公美主演の『綺麗な、悪』（24 年）は一人芝居の稀有な作品だが、本作では 2 人の名優が織りなす素晴らしい会話劇に拍手！

◆本作の脚本を書き、本作で初監督を務めたのは、クリスティ・ホール。私は全く知らなかったが、パンフレットによれば、彼は劇作家としてニューヨークに拠点を構えていたが、執筆した『ドライブ・イン・マンハッタン』の脚本が脚本家専門サイトのトップ 3 に選出され、2017 年にロサンゼルスに拠点を移した後、本格的活動が始まったらしい。

また、本作のアイデアは当初、オフ・オフ・ブロードウェイの実験的なブラックボックスシアター、イーストビレッジのどこかで上演されることを期待して構想したものらしい。そんな“小さな”企画が、プロデューサーとしてアート性の高い映画作りを熱望していた女優、ダコタ・ジョンソンの目に留まり、友人のショーン・ベンに連絡したところ、あとはトントン拍子に……。

◆タクシーを舞台にした名作といえば、韓国映画『タクシー運転手 約束は海を越えて』（17

年)『シネマ 42』248 頁) や、ジャファル・パナヒ監督のイラン映画『人生タクシー』(15 年)『シネマ 40』78 頁) 等があるが、これらはタクシーを道具として、激動する時代を観客に見せつける問題提起作だった。

それに対して、本作はまさにタクシーという密室を舞台に、中年のタクシー運転手(ショーン・ペン) とたまたまそれに乗り合わせた若い女性(ダコタ・ジョンソン) との 100 分間にわたる会話劇(だけ) だから、すごい。タクシー運転手と乗客との会話だけで、100 分もの物語が成り立つの? 誰でもそう思うはずだが、それを可能にし、かつそれを心温まる名会話劇に仕上げたのが本作だから、さあお立合い!

◆「会話劇」と言えば、韓国のホン・サンス監督の作品が有名だが、それは数名の登場人物がさまざまなストーリーを構成していく上で、セリフ(会話)を最も貴重なツールとして使っているという意味のもの。したがって、「会話劇」とは真逆の、セリフを最小限にとどめ、映像や効果音だけからストーリーを組み立てていこうとする「セリフ最小限」の映画もある。他方、私は本作と同時期に公開される、瀧内公美主演の『綺麗な、悪』(24 年)に注目しているが、同作は 76 分の一人芝居だけで構成される超レアな作品だ。

私は弁護士という仕事上タクシーを利用することが多いが、乗車時に運転手から話しかけられてくるのは基本的に嫌。くだらない世間話に付き合うのは鬱陶しいし、聞きたくもない自慢話や偏った主義主張、さらに運転手がうんちくを傾ける趣味を聞かされるのはいい迷惑だ。夜のジョン・F・ケネディ国際空港でタクシーに乗り込んだ女性も、きっと私と同じ気持ちだったと思うが・・・。

◆運転手のクラークが乗客に向けた最初の言葉は、「今夜はお客さんで最後だ。」というもの。そう言われた女性客が驚きつつ軽くジョークを返したのは立派なものだが、そんな女性客に対して運転手が、今日の売上が悪いこと、クレジットカード払いのせいでチップがケチられてばかりだとグチをこぼし始めるのは如何なもの? 女性客の手元にはスマホがあり、誰かと何らかの連絡を取っていること明らかなのだから、運転手は黙って車の運転に集中するのが礼儀なのでは・・・?

ところが、ちょっとした会話の流れの中で、女性客が運転手に名前を尋ね、運転手が「クラークだ」と答えたところから、「クラーク」という高尚な名前をネタに 2 人の会話が盛り上がることに。もっとも、そんなどうでもいい、くだらない、たまたまのネタで会話が長続きしないのは当然。会話が途切れ、女性客が再びスマホに目をやると、そこには「会いたい」「写真を送って」等の文字が。これは一体ナニ? この送り主は一体誰?

◆ここまでが、本作の運転手×乗客の会話劇の導入部だが、これだけでも既に十分面白い。これはダコタ・ジョンソンとショーン・ペンという名優の演技力もさることながら、脚本

の妙が大きいことは明らかだ。私は弁護士業務を50年間やってきたが、そこでは法律知識だけではなく、心理学者としての分析力や会話力も不可欠だ。そして、それは対面によるさまざまな事情聴取によって成り立つものだが、本作を見ていると、クラークは女性客の言葉の他はバックミラー越しでチラチラ女性客の動きを見るだけで、女性客の心理状態等を分析しているから、すごい。

スマホに目を落とす中で女性客の表情が曇ったことを見て取った運転手はそんな様子を気遣い、世間話を始めたが、その話題やその切り込み方は如何に？本作中盤に見るバックミラー越しの2人の会話はツッコミすぎの感もあり、下手するとクラークの言葉に女性客が気分を害することもあり得るのでは？そんな心配もあったが・・・。

◆タクシーに乗って高速道路に入ったのはいいものの、想定外の渋滞に巻き込まれると大変。時間帯による渋滞の予想は織り込み済みだが、事故による渋滞は誰も予測できないから、それに巻き込まれると最悪だ。もっともそれは、本作のような企画で脚本作りをする場合には非常に好都合だ。なぜなら、そこでは渋滞の時間は予測できないから、会話の可能性が無限に広がっていくからだ。

しかして、本作中盤からは、タクシーという密室空間での会話劇たる本作で、渋滞で停車中、クラークは運転席と乗客席との間の仕切り板を外して後ろ向きになり、女性客の顔を見ながら話を始めることに。それに伴って会話内容も必然的に“進化”していったが、その内容は？その是非は？

◆若い美人の乗客に対して中年男のタクシー運転手が興味を示すのは当然かもしれないが、そうかといって運転手と乗客との間で自由な会話が許されるわけではない。もっとも、それは乗客側が文句を言った場合の問題であって、時にはカチンときて、異議申し立てをしたくなるような会話であっても、結果的にそれが乗客の心に刺さり、結果的に同意し納得してしまうような内容であれば、運転手と乗客との間で偶然に成立した、一夜限りの約100分間の会話も貴重なものになってくる。

女性客がスマホ上で交わす言葉は卑猥なものを含めて刺激的だが、もちろんそれは運転手にわかるはずはない。しかるに、この運転手（クラーク）は、女性客の彼氏が既婚者であること、等を含む多くの“分析”がなぜ可能になったの？それは弁護士歴50年の私にとっても大いに参考になるものだったから、私の本作の採点は星5つ。

他方、想定外の事故渋滞に遭遇したものの、それ以外の走行はスムーズだったから、旅から戻った女性客は今日はぐっすり休むことができるはずだ。しかして、クラークに別れを告げた後の女性客の精神状態は如何に？こんな素晴らしい作品に出会えたことに感謝！

2025（令和7）年2月26日記